

一切衆生の幸福と安樂のために

望 月 海 淑

①

「シャーリフトラよ、過去に於て、十方にある、測り知ることもできず・教えることもできないほどの数多くの幸福に、完全にさとりをひらいて世の尊敬を受けるに値いする如来たちが、多くの人間の利益のために、多くの人間の幸福のために、世間を憐んで、また人間の集団のために、また神々と人間たちの利益と幸福のために、この世に出現したのであった。」(P 91 ~ 93)

「また、シャーリフトラよ、未来に於て、十方にある、測り知ることもできず、教えることもできないほどの数多くの世界に、完全にさとりをひらいて世の尊敬を受けるに値いする如来たちが、多くの人間の利益のために、多くの人間の幸福のために、世間を憐んで、また人間の集団のために、また神々と人間たちの利益と幸福のために、出現するであらう。」(P 93)

「また、シャーリフトラよ、現在に於て、十方にある、測り知ることもできず・教えることもできないほどの数

多くの世界に、完全にさとりをひらいて世の尊敬を受けるに値いする如来たちがおり、其処に住み、其処に暮しているが、彼等は多くの人間利益のために、多くの人間の幸福のために、世間を憐んで、また人間の集団のために、また神々と人間たちの利益と幸福のために、教えを示すのである。」(P 95)

「このように、シャーリフトラよ、完全にさとりをひらいて世の尊敬を受けるに値いする如来の余もまた、多くの人間の利益のために、多くの人間の幸福のために、世間を憐んで、また人間の集団のために、また神々と人間たちの利益と幸福のために、……教えを説き示すのである。」(P 97)

同じような文章を長々と引用したけれども、これは方便品の中に示されているものであって、未来の仏・過去の仏・現在の仏として釈尊自らが、何のために何をしようとしているのかを語り示そうとしたものであろう。

過去と未来と現在を時を考ふる時の区分の方法であるが、この三時の仏たちが同じ誓願のために説示をはじめられたというならば、その仏は何時も全く同質の仏でなければならないであらうが、同時にその三時の仏と釈尊とが同じ誓願によって説示をはじめられるというのであるから、釈尊も亦、これら三時の仏たちと同質であるといわなければならないであらう。

いいかえると、仏が抱く心は、多くの人々の利益のために、幸福のためというひろがりを基調にしておるといえよう。そして、その心のひろがり、実に釈尊の悟りの自覚の中において存在しているところのものであろう。何故なら、このような仏の誓願が伝道の宣言として強く打ち出されて来るには、釈尊自らによる確固たる自覚がなければならぬ筈だからである。

日蓮聖人の教えについて考える時、吾人は法華経の中の一句をもちいて、如説修行という。たしかに勸持品の色説

と強調された日蓮聖人の御心は、法華経の如説修行にあったことは疑いのない所ではある。

説のごとく修行すべし、と説まれるこの一句の説とは、平たく解釈すれば法華経のことであろうが、法華経の教えの通りに修行するという形を、その説示の中において求めようとすれば、それは五種法師であり、一念信解であるといえよう。しかし、そのような理解のしかたによって、果して日蓮聖人の躍動する精神を把握することが出来るのか、といえ、甚だ疑問であるといわなければならないだろう。それは、日蓮聖人の宗教を、頭の中で理解しようとし、辻つまを合わせようとしているからではないだろうか。

日蓮聖人が法華経を色説したというのは、心底、生命がけて行なってみたということなのであろう。いいとか悪いとかではなく、そうやってみなければいられなかったという躍動するような情熱のほとばしりであったのだろう。一念信解とは何なのか、五種法師とはどうすることなのか、いか程にこれらのことをつきつめて行っても、それを支える情熱を欠いていたならば、日蓮聖人の本意は解らないのではなからうか。

過去・未来・現在の仏たちが誓願をもたれた、その同じ誓願を釈尊ももたれた、それがただ机上のことならば、それがどうだというのだろうか。釈尊がその誓願によって、実際に人々を導くための努力を展開され続けた。それが法華経の姿であった。釈尊が実際にやられたのだからこそ過去・未来・現在の仏に通じ合う尊い誓願となり得たのではなかつたらうか。日蓮聖人の生き甲斐も、ここに生れたのではなからうか。

②

随分と長い前置きになってしまったが、静谷正雄先生のインド仏教碑銘目録を調べて、そこに無数に示されている「一切衆生の利益と安樂のために」という願文を見るに及んで、こう考えさせられた。②

一切衆生の利益と安樂のために、というこれら銘文の願文は、前掲のような方便品に見られる多くの人間の利益のために、多くの人間の幸福のために、という諸仏の誓願と全く同じところのものだからである。

片や釈尊の出世の本懐といわれる法華経の中に見られる誓願であり、片方は大小乗といわれる以前の仏教信徒らが釈尊をあがめるあまりに奉獻した種々なものに記された銘文である。大乘は上求菩提・下化衆生だと称せられ、自己のみならず一切衆生をも菩提に導こうとの誓願を持っておるのに対して、小乗は自分一身の安心を願うという風に理解されて来ているが、それがグプタ時代以前の銘文の中には、自分一身の生命のみならず、より多くの人々の利益と安樂とが願われているならば、大小乗の差についての画然たる一線は一体どこにあるのだろうか。

インド出生の人間釈尊が、一切衆生の利益と安樂とを願ったことは言を待たないところであろう。その誓願が仏教信徒の中にうけつがれて来た、そして、それが大乘にまで引きつがれたことも想像されるところである。それならば、いつどこで変化がおこったのだろうか。そのようなことを明日にする力も何もないが、予想されうることは、吾人が生きた仏教として、生きる釈尊に直参する道を見失ってしまったのではないのか、ということである。自分の頭の中で仏教をつかまえようとし、釈尊を理解しようとしてしまつて、揺れ動く釈尊を、人にむかつて語りかけて来る釈尊を見失ってしまった、定型化された釈尊・仏教を把握しようとして来たがためではなかったろうか。型はもはや仏教・釈尊そのものではあり得ないのは、如説修行の解釈が、日蓮聖人に直参する道ではないのと同様である。

③

同じ方便品の中には、シャーリールポトラの言葉として、こういう所がある。

「ジナたちの最上の方よ、はつきりと語れ。この集まりに、幾千の生類^③がいる。彼等は恭しくスカタを信じ、心が満足し、あなたの説いた教えを理解するであろう。」(P 83)

これはシャーリッポトラが釈尊にむかって、法華経をお説き下さいと請願し、釈尊がこの願いを止めさせようとした時に、シャーリッポトラの言葉として語り出されたものだが、この言葉からも次のようなことが考えられるように思われる。

その一つは、法華経の説法の座には、数を絶したところの生類がいるということ、それは人間のみならず一切の生類ということだろうが、それらがともに、曾ってブツダの姿を見ているということであり、その二は導師の語ったことを信じ受容するであろうということである。

我々とはかく教えの説かれる対象は、我々生きている人間である、と限定してものを考えたがる。だから教えに対する理解のしかたは、常に自己中心のものになりかねない危険をもちらんでいる、といわなければならないだろう。

こうした考え方は、牛は人間に対して肉を供給するために生きているものだから、屠殺されても可なりとした議論を生むであろうし、自己の意にそぐわないものは悪であり邪であるとする判断を生ずるであろうともいえよう。こうした考え方が正か邪かということは即断すべきことでもないし、それらについて兎角の論を提供しようとも思わないがただ、自己中心に考えるものの方方は、人間のみならず一切の生類がいるというものの見方とは、その本質において大変なちがひがあるように思われてならない。

釈尊の説法の会座に幾千万・幾億の生類がいますというシャーリッポトラの言葉、これは少なくとも私だけがいる私だけが聞けばよい、という性質のものではあり得ない。教えはすべてものためにあり、何もかも一切のものがそ

ここに集まっておらなければならず、一切の生類のために教えは説かれるべきものであることを、示そうとしているのではなからうか。一切の生類が幾億となくいるという表現は、この世界のすべてということであるとともに、更に、「如来たちは幾千万・幾百万・幾十万の多くのブツダに侍座した」という考えからすれば、この世界のはてしない程の永さをも示しているであろうと思われる。とすると、釈尊のこの説法の会座に集まっていた人々は、無限とも称すべき途方もない数の人々だということを示すであろう。

それらの無限の広がりをもつ世の無数の人々が、導師ニ釈尊の語った教えを信じ受容するでありましょうということがこのことは、釈尊の教えはこの世に存在するところのすべてのものに対する眞の教えであるということであろう。まことの教えであるから、この世に生きている一切の生類にとって、とるべき道は信じ受容するというたった一事があるにすぎないと思われる。

シャーリニブトラが気付かれたことは、このことであつたのだろう。

しかし、釈尊はお説き下さいとするシャーリニブトラの願を無下にことわられた。「僧たちは自惚れの心をおこして大きな坑に陥ちこむであらう」^④からであつた。たった一つの道であるために、充分なる覚悟がなければならなかつたからだろう。道がたった一つしかないということは、それだけに少しのあやまちをもゆるすことは出来ない。私は唯一の道を歩んでいるのだ、もしもこのような心を持ち、それを他に誇りうるものと考えらなければ、その時慢心におちいることになるだろう。道がたった一つであるために、それを説くには厳格な態度がなければならぬだろう。

そして、そのことを示すものが五千起去という出来事であろう。法華経はそのことについてこう語っている。

「彼等は、自惚れに基づく悪い根性のために得ていないものを得たと思ひ、達成していないものを達成したと思つ

ていたからである。彼等は自尊心を傷つけられたと思って、その集まりから出ていったのである。」(P 87)^⑤

自尊心・自惚れという心のあり方、自己中心にものを考えるあり方は、釈尊の教えの中においてついていけないのであるという基本的な姿勢であろう。だから、

「余計な者はおらず、氣力のない者もおらず、みな信仰の核心を聞く擱んでいる。シャーリ▶▶トラよ、これらの自惚れた輩が出ていったことは、まことによいことだ。」

釈尊はこう語られた。自惚のある者がいないのはよいことだというのは、仏道において、釈尊の教えに生きようとする道にとって、自惚れの心がいかに害悪なものであるかを示すものであろうが、それは同時に、仏道において、法華経において、我々がとるべき道の何であるかを、明白に語るものでもあろう。

④

釈尊はそのために一仏乗を説かれた。それは我々も仏になれるという消極的な立場を示すためのものではなくて、仏になれるのだから、何をしなければならぬのか、何をすれば仏になれるのだという、たった一つの道を示すためではなかったらうか。

釈尊の言葉は、一つの道をくり返し説き続けているように思われる。そこで、一つの道に我々が入るには、信が大切な心のあり方となって来るだろう。

「余を信ぜよ。余を信賴せよ。まこと、シャーリ▶▶トラよ、如来たちは虚言をいうことはない。」(P 101)^⑥

まずもって信ずるということが我々の道ということなのだろうが、その信はひたすらなものでなければならぬ。

「子どもが遊戯の際に、其処此処に、小石づくりの塚をつくり、ジナたちのために供養塔とするとき、彼等はすべ

て、さとりを得る者となるであらう。……大人であれ、子どもであれ、壁に像を描けば、すべて慈悲ある人となり、生命ある幾千万の者を救済し、また多くのさとりを求める者たちを導くであらう。」(P 115)

等々、釈尊によって語り続けられるが、仏の絵を描こうとする時、その人の心の中には、邪念がぬぐい去られており、子供の心は純真無垢であるために、仏の姿を求め続けている心が、そこには存するから、こういわれるのであらう。そして更に、これらのことは、仏を求める心がただ自分の心の中にとじこめられ、秘められているのではなくて外部にむかって行動をおこされている点に着目する要があるように思われる。そのことをよく示しているのが授学無学人記品の中の仏の阿難の本生譚であるように思われる。

余とアーナンダとは全く同じ瞬間に、完全にさとりをひらいて世の尊敬を受けるに値いするダハマガガナアビユドガタラージャ(空王仏)如来の面前で、この上ない完全なさとりを達成しようと思ひ立った。そのとき、アーナンダはいつも絶えず多く聴くことに専念していたが、余は勇気を出して「さとりを達成しよう」と努力した。その故に、余は非常に早くこの上ない完全なさとりをさとしたのであるが、アーナンダ尊者は尊きブツダたちの正しい教えの蔵を保持する者となった。」(P 129—131)

これによると、釈尊と阿難とは同時に出家して、さとりに達しようとした。そのための道として、阿難は仏の教えを沢山に聴こうと考え、そのことを行なって来たのだが、釈尊の方は、さとりに達しようとする道を選ばれたのだった。

釈尊が仏となり阿難が声聞となって、その時、我々の前にあらわれて来られた。二人が俱にさとりに達しようとした前生を持ちながら、一人が師となり一人が弟子となってあらわれたがいは、聞くことに専念したという行い

と、さとりに達しようと努力し続けたという、二人の行働のあり方にちがいがあつたとしか思われぬ。

さとりに達しようと努力し続けるというのは、さとりに至るための道を、ただに歩き続けるということであろう。仏によって教えられた道を、真一文字に歩かれたということであろう。あれもこれもと考えずに、ただ一筋の道を歩いたということであろう。何故なら、

「如来の説教を聴いて、ただの一詩頌でも聴くか、単に決意をしただけで、「この経典を」喜こんでも、これらの良家の息子たちや、あるいは良家の娘たちはこの上ない完全なさとりに到達するであろうと、余は予言する。」(P 144—143)といわれるさとりに達する人は、実は、

「幾千万・幾百万・幾十万のブツダの許で誓願を立てた者」(P 143)といわれているからである。

そこで更に次のようにもいわれる。

「人間のあいだに、この説教を説き明かすために、世間の人を慈しみ憐んで、「前世に於ける」誓願の力によって「この世に」生れた、如来さながらの人であると知るべきである。」(P 145)

法華経の一句一偈でも心にとどめる人はもとより、この経典を受持・読・誦・解説・書写する人は、この上ない完全なさとりを完成した人であり、如来さながらの人であるという時、それは仏のさとりに達するには、右のようなことをしなければならぬことを示しているだろう。そこで釈尊がたざさとりに達しようと努力され続けたことは、法華経を受持し、広く人々のために、法華経を説き続けたことに外ならないと考える。

釈尊が法華経で説かれたたった一つの道、それは法華経をまだ信ぜざる人々に伝え続けるといふことでなければならぬだろう。見宝塔品以後の説示はこのことを求めつづけ、久遠の本仏の生命の中において生かされている我々を

抱握することによって果された。そこで我々は生かされている自己を抱握し、更に広く次々にこれを伝える道を歩まなければならない。

一切衆生の幸福と安樂のために、この願で出發した仏教伝道の根本精神は、ここにおいて、何となく幸福と安樂を願うという態度ではなく、もっと強く、もっと明白に、もっとたくましく、法華経を伝えよと、幸福と安樂を願う人々の道が示されることになっていくように思われる。

【註】

- ① 多くの人間の利益のために、多くの人間の幸福のためには、梵文では *bahu jana hitaya bahu jana sukhaya* となっている。更に、神々と人間たちの利益と幸福のためには、*hitaya sukhaya devanam ca manusyanam ca* となっている。そしてこれに対する妙法華経は而為衆生演說諸法となつてゐる以外見当らないが、ただ過未現の中の現在について述べる中では、多し所^レ饒益安樂衆生となつており、梵文の意と同じものになっている。更に、正法華経では、未來現在亦復如是……而為說法皆興大乘といふようなものがあるにすぎない。
- ② 一切衆生の利益と安樂のために、と書かれた銘文の種々については、静谷正雄著、インド仏教碑銘目錄を、法華経におけるこれらの言葉の内容の種々については、宮本正尊・大乘仏教思想よりみたる法華経（法華経の成立と展開）をく覓わがたい。
- ③ これに関する梵文は *Saṁgha Parivāsa sahasra prāṇinam śraddhā prasannāḥ sugate sagaurāṇā* であり、妙法華経は是會無世衆有能敬信者であり、正法華経は此出家者衆庶億千恭肅安住となつてゐる。prāṇin は living creature だといわれるが、妙法華経の衆という訳語には多くの人・多くの物という意があるからこの世において動きを示す人や他の物という事にならう。正法華経の出家者衆はそれらを出家せる人に限定して、小さな範圍に縮小しているように見える。しかし、正法華経の長行の箇所においては、蚊行喘息蜘蛛蠅動群生之類と訳しているから、これは明らかに動きを示す生物を意味していると解してもよいであらう。釈尊涅槃に関する伝えの中において、人間のみなならず一切の獣までが集まつてその御入滅をおしまれたとあるのは、単なる言葉だけではなくて、釈尊の教えの偉大さを示そうとしたものだらう。

④ 妙法華経には増上慢比丘將墜於大坑。とあり、正法華経には悉懷慢恣、比丘比丘尼墜大難難。とあり、梵文には *aha*

ināna prāptās ca bhikkṣano mahā prapñānāṃ prapatis yanti と示されており、自覚を忘れてしまつて自分勝手に自分の利益のみを追求する態度の非なることを示している。

⑤ 妙法華経は此輩罪根深重及増上慢、未得謂得、未証謂証有如此失、是以不住であり、正法華経は至慢甚慢、即從坐起稱首盲足、捨衆而退であり、梵文は idam abhinānakusalānulenaprāpte prāpta srujino 'nadhigate 'dhigata sam jīnah, ta atānānāṃ savranāṃ jhāva tāhāṃ pāśado 'patrāntāh となつており、自惚れの心、自己中心のものの方と考へ方が間違えるものであることを示していることは一様である。

⑥ 妙法華経は汝等当一心信解受持仏語、諸仏如来言無虚妄、正法華経は於彼乃当篤信、如来言誠正。であり、梵文は inesu buddha dharmesu sradādhadhvam me śāriputra pariyatavakalpayata. na hi śāriputra-tathāgatānāṃ mṛṣa vādāḥ sanvidyate となつてゐる。正法華経のみやや意志の鮮明を欠くようではあるが、仏陀の語を信ぜよ、という意図においては同一と見てもよからう。

⑦ 妙法華経は大正VOL八P8C(9)a、正法華経はP71b、梵文はP50(51)。

⑧ 妙法華経は大正VOL八P30aで我常勤精進とある。正法華経はVOL八P98bで、常修精進とある。梵文はP218で、そこには aham ca vīryārambhe 'bhīyuktāh と書かれており、それらは釈尊が勇氣をふるいおこして実際に行なうことに努められたことを示している。

⑨ 妙法華経は大正VOL八P30cで、正法華経はP99bで、梵文はP224良感衆生、願生世間、廣演分、別妙法華経。は妙法華経

⑩ 正法華経には、普慰傷諸天人、從其所願而得自恣常生人間欲演斯經。梵文は lokasya hitanūkaṃpakāh pṛaṇi dhāna vasesopapanno śmīh jambudvīpe manusyedyasya dharmā pariyāsyā samprakāśanatyai とある。願つて世間に生じたい、その所願によつてといひ、誓願の力によつてといふ。誓願といふもの考へ方が法華経の中において占める比重の大きさは、充分に考へてみなければならぬことであらう。久速の仏の生命がある時、その中で生かされている我々の働きは、誓願を確認するところからはじまるのではなからうか。